

最終回 ストレートコンバージョンを 戦略・武器として見直す

メインフレームの資産を他のマシンに移行させる方式には、大きく分けて次の3つがあります。

- リエンジニアリング
- リライト
- ストレートコンバージョン

リエンジニアリングは現行システムを抜本的に見直し、他のプラットフォーム上で再構築する方式、リライトはCOBOLやPL/Iなどのメインフレーム言語をオープン系言語に書き換え、他のプラットフォーム上で稼働させる方式、ストレートコンバージョンは現行システムのプログラムを変更せずに他のプラットフォーム上で稼働させる方式です。

このうち最も多く利用されているのは、ストレートコンバージョンです。その理由は、メインフレーム上のソフトウェア資産はその会社の知恵やノウハウがぎっしり詰まっているものなので、それをそっくり捨てて他のプラットフォームへ移行しようというユーザーは少ないからです。

つまり、現在の業務プロセスを使い続けるならばストレートコンバージョンがベストであり、業務が今のビジネスニーズに合わなくなり、そのプロセスを変えざるを得

ない場合は、ストレートコンバージョンはまったく意味がないということです。

*

ストレートコンバージョンを行うときは機械変換ツールを利用するのが一般的です。

最近、その機械変換ツールの自動変換率を100%などと平気で言うベンダーがいて、驚きを禁じ得ません。110社以上のストレートコンバージョン実績をもつ当社でも、移行後のソースコンパイルまでは100%ですが、テストまで行くと、自動変換率は90%台という数字だからです。自動変換率100%などと標榜するのは、ソースのコンパイルしか実施していないからだろうと思いますが、それでは実践的な機械変換とは言えません。

*

もう1つ、メインフレーム・プログラムの機械変換を難しくしている「天敵」があります。

それは、NHELP、EASY、ALPSといったメーカー固有の簡易言語がJCL（ジョブ制御言語）のさまざまなところで使われ、機械変換によるコンバージョンを阻んでいることです。

それまでのストレートコンバージョンによる移行は、これら簡易言語との闘いであ

ったと言っても過言ではありません。JBCCでは、JCL中の簡易言語プログラムソースをそのまま残し、実行時にCOBOLに変換してコンパイルする（インタープリタ的に実行する）ツールを開発し、この課題に対応しています。

*

さらにもう1つのポイントは、機械変換ツールの変換率は“育てて、高める”ことができるという点です。

大量のプログラムの機械変換を実施する前に、全体の5%程度のプログラムを対象にテスト変換を実施し、その過程で機械変換ツールのバグを発見したり、カスタマイズを行うことによって自動変換率を引き上げ、変換品質の維持を可能にしていきます。これは、お客様固有のプログラムと機械変換ツールの相性を高めるプロセスとも言えます。

*

ストレートコンバージョンについて長々記してきたのは、お客様の事業環境が急速に変化し、基幹システムを含む重要なシステムを必要なタイミングで最適なプラットフォームへと移行することがこれまで以上に求められている現在、企業の宝であるソフトウェア資産を的確に変換できるストレートコンバージョンは、お客様にとって大きな武器になるということなのです。

メインフレームの移行を検討されているお客様は、今一度、ストレートコンバージョンを見直していただきたく思います。

私のお伝えしたいことは、今回でひとまず終了です。4回にわたり、ご愛読ありがとうございました。📧

ご存じですか?

メインフレーム・マイグレーション再考

板垣 清美氏

JBCC株式会社
さらばレガシー移行センターセンター長



Transition

Conversion

パロース、日本IBMを経て2001年にJBCC入社。東日本営業推進本部長、理事などを歴任後、現職。IBM時代にメインフレームから他のプラットフォームへ移行させるマイグレーション手法を確立し、JBCC入社後だけでも100社以上の移行実績をもつ。メインフレーム・マイグレーション分野の第一人者。